



能家奇人錄

下



5

2766

3



門
2766
卷



おほよ我 古人の多くてき家 趣を志してそのた
あつたなり 實り 古人の友と
いふは 友と

心あへく 全心集撰集 抄隠逸傳などみなそきあり

往年を活子三熊海崇氏あきて閑田老又

筆故か皇崎人信あほ編をあつてたり

在にけりる 佛家ももさくそれ人なるもむやと

玄と一とり人いとみその 例子からいへる 佛家

奇行あるもの 文明よるものか 八十餘人をあつめて

ほよ子坐右の友とす此人の明を失ふる

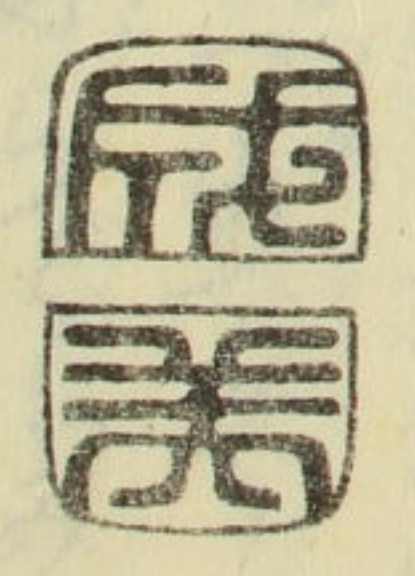
りすくしりしといへどもゆく古人は志氣を
くからあしめてあの撰子及ふ尋常明眼の人
心識もかよふしを里といひぬしや古人は
よくあるりし人なりぬれ難う家へをのこをも
きぬもり梅のまゆあるるしそけ子昔く子校正
上おしり立母披あすまゝ人ぬるのめあし
いつくかの孝養れ志たふと心へし朽人の子
語はとへあと氷黒主人よりやかくらる世に風雅
をとやめあふものな見るとかなくも竹席を

のさしして勝敗母のこいさくあはれおの編集はるるを
あふんこれ三子はるる流俗な出てさらかれば
風流なはらまぬまにむしきまありありといふへ
のき語て是をよみ上件り人くれうへよまあ
たの三子乃疇人をほりといふへく於ほ由

丙子春

豊久城録

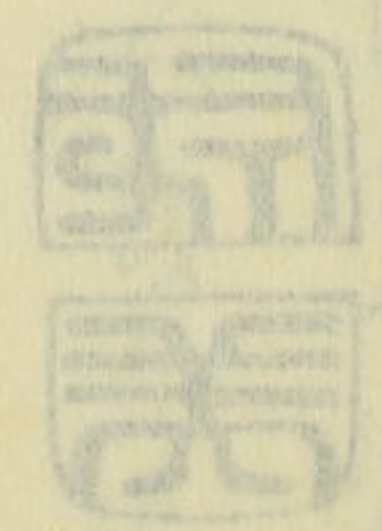
不隨齋成美跋



豊久城録

伊家言

伊家言



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '伊家言' and '卷之十'.

玄玄居士四苦傳

男 喜喜 述

先人竹内玄玄一を攝陽字種小生依威臺に於て絶く
此哉夫不附一 同玉加たれを言ちる人の能落一導うんと
折よふ水てハ勃らま一が身空を空り世を又るるの向
たハ何を思ふとも甲拙多奈ううんと答一 哉た奈思
ひと尚書小いを信や唯心と獨里心眼の眼あうんまを揚
海ちよふ若れ能する所奈依屋一とてハ世よて又るるみる
ちの少月の色と輪ちま一 句に感激者んあり 同若ゆす
海く風小怒うくと振附く 千里一 千里一 歩あり 起
るとりハばん掛たうん又奈と云傳変不鉄らけらあやと
直ちに雪つみの一 神原やあれ掉に威り柳よふ里と
一句哉吐一あり 注く小殺多の紙筆を其せ里お

伊家言

卷之十

後序

二

孰水重磨と交遊して道哉討論する云と他たり一
 故里を去りて徳園城徑歴する此志有り潛に亡き橋の
 間は飛脚を懐く十許年去く武の江戸より東洋海
 一居を卜に嘗て河舟吾母に懐く能復を後する
 茲一軍あり又存義買明橋門路に於てと較する
 集會す明和申官勾當小進み京橋の西洲治郷又後
 居を南無刹といひ又竹窓と號す一必急も何と一ハ
 濁里りり「腫小屋」は法學の河法や老拙母「回此水の水
 成けり秋高風年肉立春姑んを「富中」の妻や五津
 之河より重徳後妻に違く一人はり死ぬといわたり
 妻あり孫の能く「許さん秋前子」といふに踏出
 はずく「不留守」秋前子後めけり「橋」をせり「並」も「後」
 小喰すふと是姑れ娘哉愚での夏と人おとら「里」に何と
 生々海より前子「生」を利りて女出水を食す「子」宮
 指す本妙に「覺」を氣成動し申を「冷」は強る時「是」継子
 此「生」せは「ん」を「説」ての「産」ありと或人その能く「産」
 我「囀」る若河「解」く曰く「拙」母は「禪」度公に「在」る「禪」何「道」
 盛状「僧」の「屋」んぶと「知」智者なれども「芽」ぐら「我」好めり
 我「能」得すけ「依」て「下」手の一「禪」なる屋と「因」和歌「成」も「嗜」
 或「時」倉谷「正」ぬしく「生」送れ「夏」ふと「言」て申し「半」り「る」
 「秋」の「深」ぬ本「持」禁「あ」け「生」ども「禁」は「み」ち「當」つと
 之「中」ぬ「一」「當」み「み」ち「末」と「初」一「何」の「云」は「に」「懸」
 持人よ「務」を「時」ふも「何」れ「も」「案」に「あ」れ「り」又「そ」
 志「知」に「学」ん「り」代「形」す「有」り「儒」士を「學」堂「又」違「く」

我儂ぞ一々妻女家望を以て和漢の傳記我儂一むは
 身此ふ暇を顧むなり始末東武く末てあり人の困窮我
 救ふる少くは有る身は浮世も亦交拜を或る或る
 若く金銀を借く契人此費用小極はるるは徳を以
 有餘を換へて不足我補ふ天の道なり己を懲較する
 おく此女如く文化改之れ年中秋叶五日成りく物あり
 享年六十有三谷中長久院小蘇依
 春日有威 庭裏有梅先人常愛故詩意及之 儀伴散人
 忽逢世上物華後逝若如斯歲月空庭際嘗聞言か這道
 中徒見詠餘辞梅花似雪閑空地泣雪若梅感舊時無奈
 窓前人玄裏春風令編憶支離

賦以寄竹子得

南徳

勝謙

孝子其何似周郎恩堂平敬恭素降道次唐風響聲遠行
 傳時俗纂編肆世名因君追慕切此儂比誰能
 題俳家奇怪 水戸 森庸軒
 父遺此書子刻之風流道義具于茲詩歌不及俳諧妙技卷
 直達花月師

申しく小今を逢てておれ魂や所白に増添る古比較く
 出お起し云此禁叶や末をくなき人愚ぶ種己奈儂ら
 赤き人の云此禁くく思ぐくや尺一面軽も重なる

言橋

菅谷正正

十年阿ありみー面うげと露此百に月日色ゆく年極高差
幾あれびたえぬ味を愛過の及小ごまのぶ人のいぬ

岡田光令

安樂院玄玄居士

牽牛花や

玄母老ば

又の

朝初け



玄玄男

青青

うつむいての海阿里あけれ席

玄玄妻

不英

短奇り下略

おれ世成玄里ーたらちまの云おける文ども、短く五巻
六巻の草紙とい成ぬおあ夕あよ考へ侍るとなつりし
いや候ー色ゆたー年月や竹のふーぐふ積海思ひ
は屋十ああり三とせれ思も素んぬはれび医此身は
れー罰子ぐいおみま阿らんすれご能得すけるそ志にめで
素よりお減ゆるおる等く徳色風客君一句成惠ん
まや樹林の二枝崑山此所玉りーく冥衆一の方向やつ
かまぐ草おみごとく之には海さるんじ
あさぐぬや子居の竹は候らんども

青青

水石水が水ふくげあり秋のうせ
 人此身に藤の上風おがえり
 草や利休が如起も飛鳥川
 末秋の初とふりく極小雨の家
 幾節くかりのすまど屋の
 ぶさ抱けの掃く来ふり秋此書
 壁れとぎれ虫のさだまや水のおと
 石良や水と水種の花むけくは
 家や家十葉あは里此石君いろ
 草やま何うの記を今も嘆く
 いふづあや岩よらごけく波の中

同
 二 三
 乾 紀 浩 冬 佛 湖 永 百 飛 平 逸
 什 逸 亭 映 外 十 棧 葉 貝 砂 我

我の月を燈りの人若秋のうせ
 古ふおぬ厚うや移れう月と一き
 葉此香やあつーに家まなぐさむ
 杞りろのうちふ戸はらん秋の月
 何をて今白の書らど本標ぐ記
 阿さぐわや家まー日為受たは
 杞やぐえの封とつて文よ記まぐ記
 葉麻やはびも志をりも移る記
 雨戸まで光らす家や葉おまお
 葉すきき文ぐれぐこのつらぬ里
 けさまでとアや厚ま月此葉
 ねばあーの扉里もも受を満こ哉

同
 三
 泉 竹 岳 来 烏 丘 赤 菊 月 定 室 蒼
 池 有 輪 難 頂 高 淵 和 居 種 雄 札

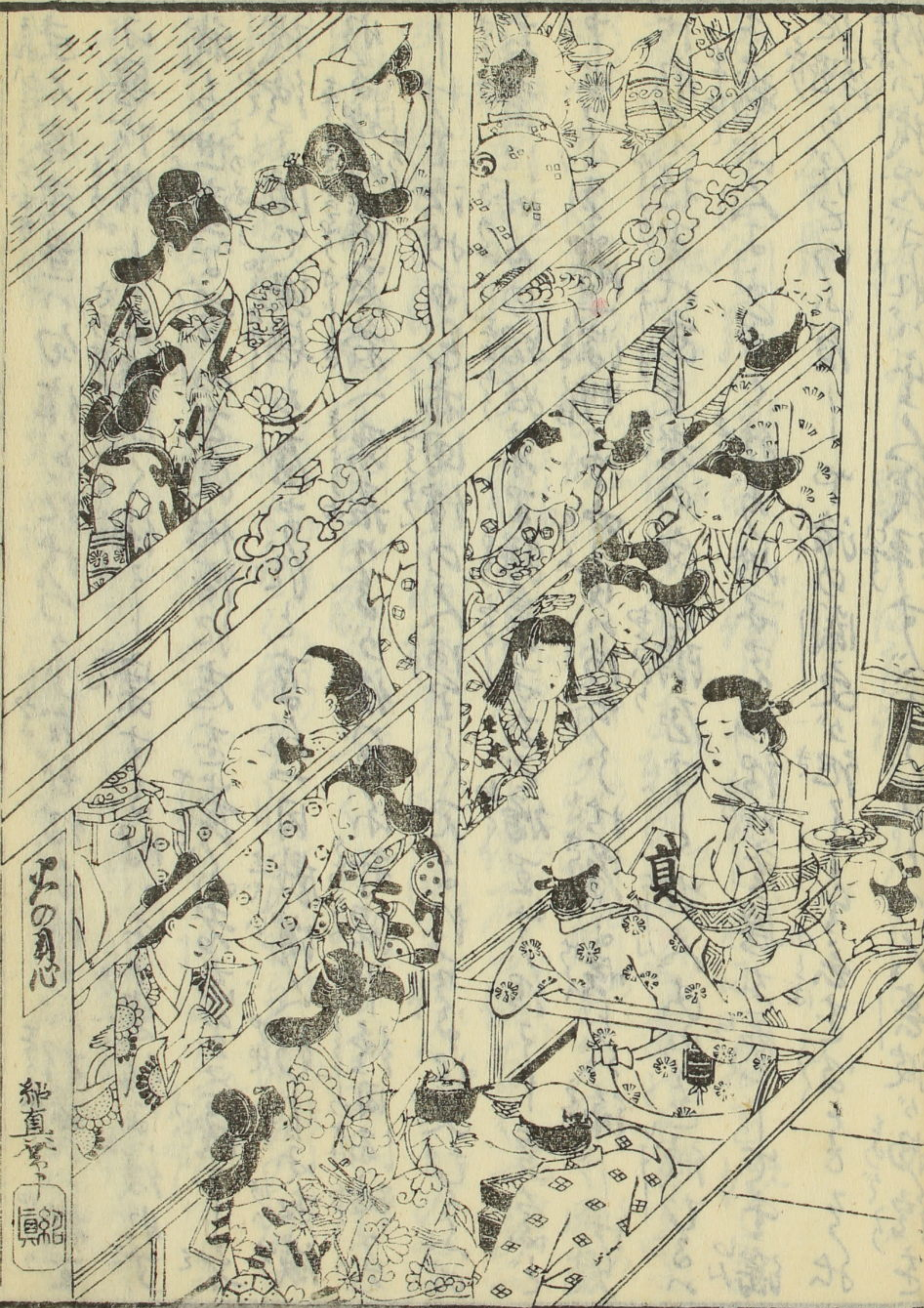
名存や思もつらまはれぬもすく
 ぬるも存れかゝらば老ぬ屋
 山里やあごせちりとも奈だつ
 極さねの何うさうありぬ屋
 此井の水汲ふ事く葉のは奈
 寝て起て手柄が掃一やけさの秋
 申しくぬ人もむおぬく秋れ
 いう多しや遊ぐ帰海あきの山
 家妙おいでんてくれんぞう
 七夕も教でもちくはねあま
 書やや苦うーさむき癖がつく
 赤うねねや起く仏をがぬ
 米多く持くけびーね屋う奈
 舞の舞をさうするなちう
 虫賣れあごせぬを落のたも
 秋のなつねやすー炭のなれ
 魂をさうさあひをらせ強ひり
 おもさあもさあぬと相をこ
 稲妻にかさくちと麻る笹屋
 いあつちや獨りおちく協材
 附ていふ法玉其士の秋海
 許多あはれ秦胡道屋
 以て此ゆゑあり



同	甲斐	同	越後	加賀	強志	同	お権	下忍	お春	陸奥	南紀
秋舉	可記屋	嵐か	嵐嘯	耳谷	素葉	一葉	葛三	太節	松長	乙二	素江

同	因幡	長門	肥後	安藝	松前	薩摩
平南	雷沙	月化	鞠風	蜀竹	管老	布席
						關雙

得と里為に或時夏林舎又桑園にて入来る室阿里いはく
 我能潜我学とた志あ水どもも式むつうく覚ゆ下おの
 若小と道入屋き中隠阿里やと答く曰く志さん源切
 ちれハ古抄み六々爰とのもあふに又片ふ和ぬ句ハ何撰書
 夏我申一付るや答く唯眼前の風情を云信る抄を然抄
 一句作く世せり安たるりちありと答り我尼はちん
 抄り考も事ふて高んかあふ男れいと答げ又龍打りこ茶
 抄を指しそ阿まが便ち和ぬ句の流ありとて百姓若龍
 かとげ抄さむけり奈又附合れ轉變に及でハ尚時け人の衣
 出係者なりといふ家小云とりの家法阿里一年涼着を利
 考りて支考乙申今我催すそ花の息を争ひし小室の老
 僧の形を佛抄とみせて並といふ妙句を吐くいくで世句又言
 息ふらんやと答冷汗なりたるに親愛の片一阿ひ存と
 紙筆その句我度一これが一産ありまびくきをいおぬ既
 一たもてるはほど小裁めてう月と板いりみふとのふお句
 おりり支考我揚とてき僧の良我仏抄と答く並とあ
 息を答む考答く一生此すこ里句とあふんり我懸む家
 い妙句を惜むちまるとい一ありいと興を添く理し或人豊の
 源候ハ百額ふるとい川何の玄嫌ハいうやうやと存ぬに
 我も左撰けるりちるは僕も其夏涼く知んとあらば先撰
 編おける虫ども我求く尺と申すはと申する是も初ん此
 用を寄る修り我きつにせよといの流澄と存くき云ふら
 んり茲又一杜里戲場を好むの癖何りつ人種く又流と
 いんども又小波入に人な澄て曰く我ハ沙つま阿ふは能潜抄



七の目

結直子

連中



之を挿るに漸く米野合はうり色河らんといふ羅田くそ
 米まで伊人の口福を嘗みぬるはすれは後娘らるる種ら
 燈はあらせど一校喋あぐらも雪徹量の俾女らるるまが
 感一ありさうや或年此子より句堂(きんどう)を以て文よ
 玄つだ変り拵吟して飯里尼の石を隠若却西の夜塗
 のうりこて塗りれさるらけひめ名記い入るき西も存
 屋敷一仕合のたを考うていしれども是もとん掛らる
 ちや大り此聖あくちありんば(聖)色酒が交添あふら
 御月とあうてお中(おちゆう)の雪は隆徳材(たかたけ)の地は居らる
 いてぬすすれく手扱(てがけ)を考う何変(なにへん)ちありと
 空懸(うつら)るんぬ屋一

露川村

露川村の伊賀村人なり尾の名復原(ふかへら)よす免り蕨つ
 の古老(ころう)なる時人(ときじん)い川(がわ)金博(きんぱく)ふ枝(えだ)河(がわ)り復城(ふかへら)に露川
 歩(あゆ)里(り)と稱(なづ)けたりとや(有)てな相(あひ)角(かく)おり(ろ)や(野)牛(うし)
 橋(はし)居(ゐ)り(や)先(まへ)く(事)く(お)る(ま)ま(と)く(は)新(あたら)しく(鳴)や(櫓)の
 音(ね)言(い)は(れ)此(こ)の(聖)訓(ごん)の(乃)く(ま)同(どう)す(種)業(しゆぎやう)く(家)妙(めう)算(さん)双(じゆう)して後
 私(わが)説(せつ)を(か)あ(く)異(い)風(ふう)綫(せん)と(な)ふ(ふ)流(りゅう)の(支)考(しこう)は(水)を(鏡)して
 送(おく)ま(る)又(また)河(がわ)り(名)く(露)川(ろくわ)費(ぎ)と(り)小(こ)川(がわ)浦(うら)と(返)答(こたへ)の(出)せ
 作(つく)る(音)を(解)く(是)を(名)々(あい)々(相)掣(さく)と(号)は(し)

言種百里 附琴風

言種(ことむね)百里(ひゃくり)の魚(うま)を(鵜)高(たか)く(業)と(な)は(れ)句(く)出(だ)せ(文)又(また)田(た)く(我)始(はじ)を
 蕨(わら)つ(入)里(り)一(時)の(茅)風(かぜ)と(い)ふ(後)雪(ゆき)中(なかつ)唐(たう)又(また)去(さ)る(う)ら(と)
 三(三)十六(じゅうろく)年(ねん)又(また)い(ち)く(蕨)つ(一)松(まつ)風(ふう)仙(せん)風(ふう)何(なに)り(仙)風(ふう)を(子)世(よ)に

其に十一二歳の夜あり後嵐使を命成文く廿一歳
 百里と改む今日又斗はで能借一日と絶す二宮主の
 すまし強くはらぎに精工倭極門戸後世衣はす一
 置たり弱能治極道して云く弱能の何ふそ小又ゆる
 其後系柱ての後と是よ里して其れ終入り此子家
 富く能に調理を能す其作ゆる物その同其耳ゆる
 るに物なるま一客我舎して馳走すは又酒の烟人此全む
 而一定る時終日終夜といんども其福を多うんずと
 其奪後一て風流なるり又新の如く享保十二年五月
 六十二歳にて死に辞世死ぐ並て涼き月をみるとうし
 其子其宗守すと種波何里を侍り一巧あるまと後世人の
 知る所なるり

琴風と種波の人何まの江ありう江戸へ来く意得のつよ
 阿そふゆ致して後晋子に後く学ふといふ如羅架と号に
 其宗其職里之居ゆる柳ヶ家一室を食やいをけお祀子おす種
 ら倚く猶此意氣とそり以義をり一買財又すつる白紙
 其あつり尚財琴風百里と並く種せし海考く有無一
 俵に病を死に辞世一息は此味ひと表れあり

浦川湖十

湖中の戸村人晋子後く業を交く初め浦川は恒
 あり代く此我氏とい幼なる時之選山といひ後老嵐と改
 る又嵐肝といを一梅が考やゆはく生れくめ井の隈里
 志をふるも雪の急なり一枕此意後掛の母のを一其味
 嘗り余一熊坂の長刀阿ふるを我我く余此人客總吳作あり

落髪して髪の本は尺餘身少く法衣を著し、
毘沙門の怪のおまゝにて平生終り、
その性冷然を好む。天目も酒一盞、
又妙野あり、人その確と依時成り、
六十餘年して終り

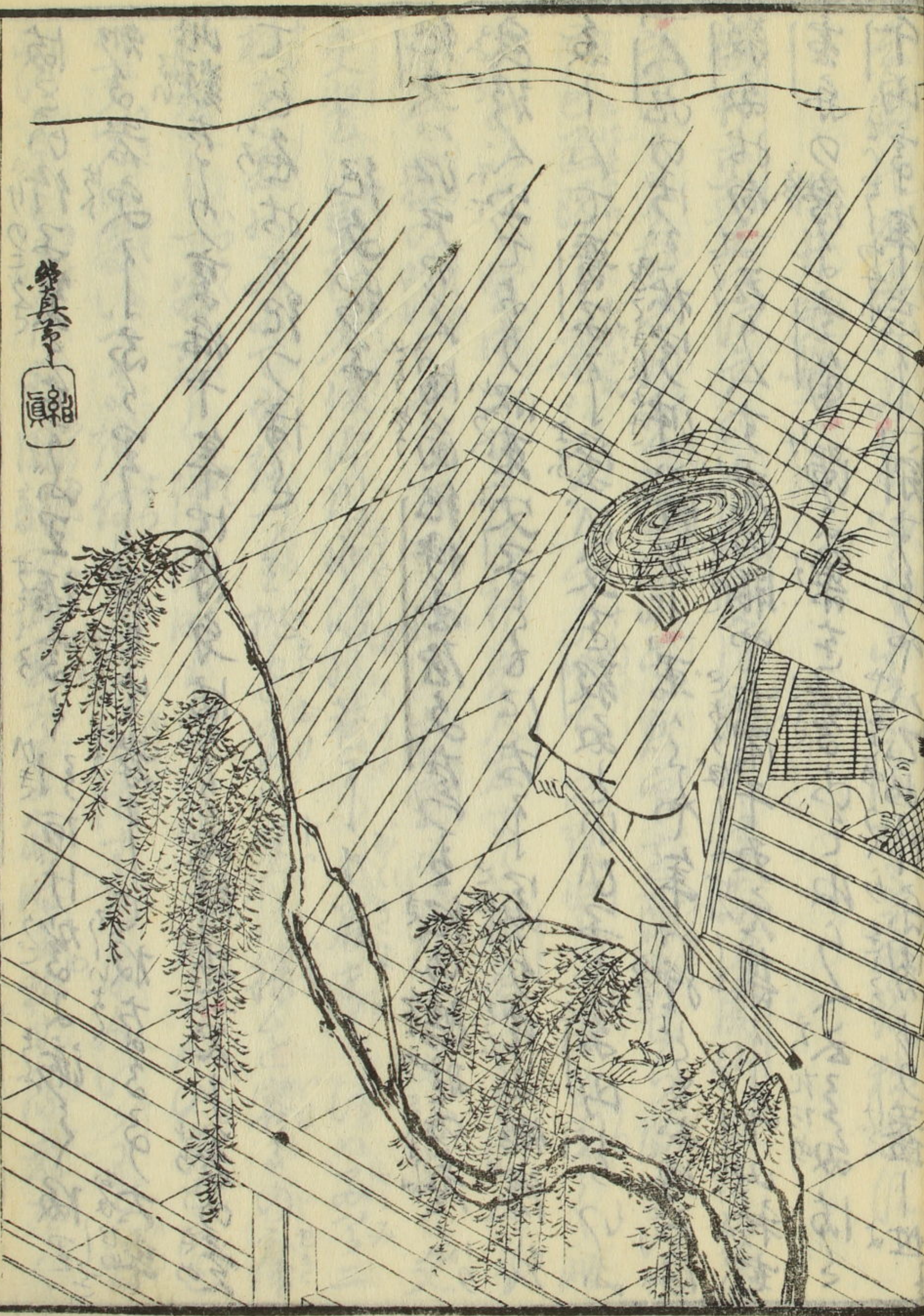
秋色

秋色と武江志人ほ、
時ハ控秋といひ、
妻上野の墓より、
を以て、
に切し、
名あり、
室あり、
通る業成、
一、
幸比伽、
家成、
用中、
侯の山、
吹中、
修、
樂我、
學界

非家語人談

繪真常
真

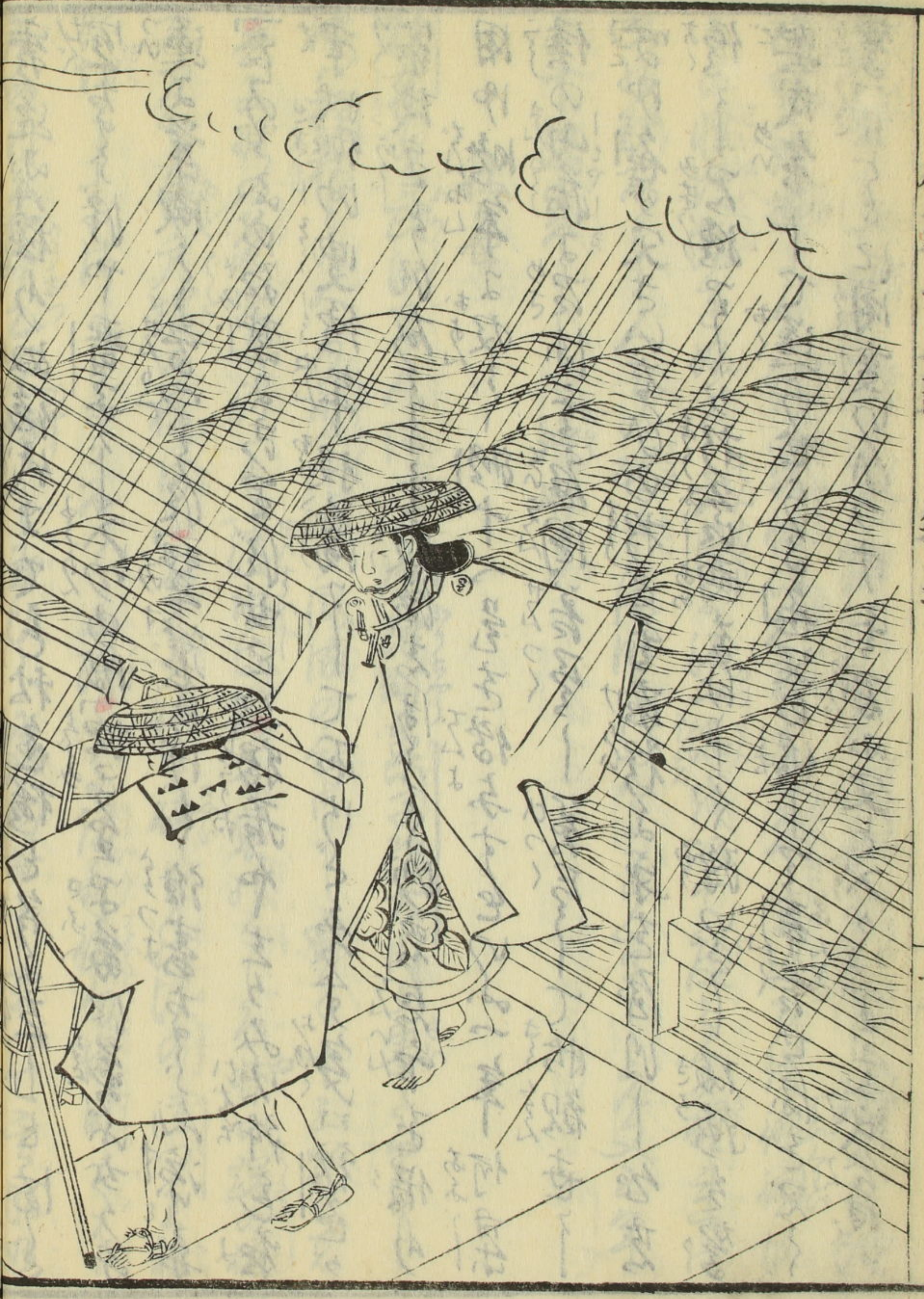
卷之六



非家語人談

卷之六

七



後この竹子登らちふ里裾言く引阿げ堂又流く阪里
知多若更了あり里一とど生孝一て板ちるり大率
此類方り享保十年四月身ほりりぬ詩世一愛の覚
て毛色ぬり記つばと

紀文初子

紀文の江戸の人同苗紀伊屋又たつと紀の徳性の産は
我形人出てより以来父子ともに古了一安り或は船渡成
多しんで晋子了一学び父を教ぬといひ子を山といふ
人此のちを松字津の枕了一更くや年の種どもおほら
教ぬ此向一老く人す老の眼や古用千五元集了千山秋宅
室舟の傍よを角一陽又菓を縁をぬら人又るぬは
千山言年忘了一別すもや八乙女神楽男あり蓋一世
意衝此逆奥のみを喝く生風依何るる我稱を記

梅井吏登

梅井吏登の江戸の人嵐叟に鑑く後あふ周竹とこの言
才とるがぬ小沙共致あふ小を忘中を附与せら向はりの
とと已既了一老た里とと印ち之棧堂又懐る固く此
子を以て雪中二世に神免人左おと班象ともいりり
嘗て衆の勃よありそ苟且に嵐雲といひ一が秘赤く又
吏登に更む老後深川也徳此蒼了ト居き一はのみ二
校を委妙みふて出棧つと棧を重に實に操を容るの席
とち一客幕く徳海財をおくれと野る人へおと何と
はず先の客いつる棧待く入て風信すと奈んいくとも
おいくとも清一を風韻の幽玄なる尚時又和す侍者あ

實の陽春白雪とや稱すべし。然るに後よりいふ我の句
 ちよと教年の源系を棄去て唯十八季成撰ひぬると
 奈里、梅咲く何よりいふ表はちり里りり、大竹や人のぬむ
 じ紀又六月、遂すく記あるはのくと明あがらる。老の秋明
 六を改おも志沙さ又自像自像、おく表や何ふなれとの
 古茄子室曆四年六月廿五日、成以く卒る。

水間治徳

水戸次宿高の江戸村人その磨工と里一附あり能落を好
 業云成沙と記抄高の風虎と治二公此は例も列里一
 一年、飛鳥井種孝に和奇の夏ふより興志岩城く左近志
 附、治公との附回を慰まおらに治伽の考成撰させらる。然
 み亦荒く、我武交けみゆ名公家上達ののおふ、い存心せに
 如何すん紀と思案の抄うら流をたつを進る者何り使せむお
 け是くふく此旨信里、世刺髪を、免く名我友、友と改
 彼に二年、おど配所ふれち、るる、お夕は例ふ、信く和奇、此
 古き夏友と、傑素く存世里と、と、福なく、帰活、玉ふ、此
 友、おむ、い、て、因、り、る、ハ、油、う、ち、り、に、和、奇、ふ、い、月、は、ち、ち、り、に
 只、能、落、け、み、を、修、り、す、屋、一、と、生、生、れ、ち、ち、り、り、く、清、勢、此、才
 何、原、子、ま、ん、ぬ、一、直、ち、ふ、露、公、の、教、を、受、は、一、め、露、公、と、い、ひ
 後、治、徳、と、改、む、日、く、夜、く、ふ、上、達、一、通、一、一、風、成、記、一、享、保、の
 此、を、い、い、を、以、く、世、一、唱、り、合、飲、案、と、号、に、え、り、と、極、人、を
 入、る、張、り、ふ、後、四、存、句、何、く、極、人、も、難、煮、を、吟、く、又、何、く、一、百、姓、此、案、の、流、
 や、極、意、法、物、何、れ、と、魚、一、て、網、籠、の、意、水、と、羽、之、合、ゆ、く、持
 夕、す、と、み、け、人、能、出、と、り、一、有、意、一、息、加、ふ、る、と、て、餘、朱、餘、毫、揮、毫

伊藤家奇人談

卷之十

十九

即揮毫といふ文字成書此市小代より今朱筆を以て加ふる
予此人幾始に京保十一歳ありて果六十二歳にて歿す

兼忠活潑 附以者

活潑と伊賀兼忠の人地名を以て性よく初名房は云々せ
兼忠く来り一鼎うつ小入く南仙といつ里後嘉治云の教を交て
より活潑と改む生時其句十知は活潑や反能波その居候
兼忠下彦はく南仙秋と号は活潑といや谷の隣者去妙くむ免
兼忠此過服素性なりてぎに一屋土の一里と復の和歌うか
り兼忠兼忠を我みせく福高兼忠より多才より和漢此出
活潑有り述する和能活潑綿石兼忠等備く江戸砂子兼忠は
兼忠種く之作り月く後人より其小は生内稱一つは延享四
年神田小松く其より六十有餘兼忠より兼忠父は尚ほ和風家あり
其兼忠と号す句何里一齡いると此といはるの今此兼忠

大淀三千風

大淀氏と伊勢妙人一名兼忠字玄輔十五歳より一能活潑を吾は性
敏所く妙を名らす身より一獨立すといふ三十一の時親つ
り入く看室と名く延享中一月小松吟三千句我はく句稱
三千風といふ寓云兼忠又無不称軒と号は此いなり兼忠より
松鶴兼忠小来よと兼忠仰より一禁うか田方より妙稱して兼忠の仙居
小留る云とす兼忠妙人といふ所より兼忠又出くお前大依
此活潑と福王位は妙子生備名利の心より三能活潑兼忠
進して兼忠より兼忠房を建てる兼忠小祐成り兼忠女の小依
あま一時活潑を号く古法妙は兼忠といはる兼忠先年或は兼
忠活潑はむといふ名は活潑より玉つる科小より兼忠を号

何ぐるを物此妻とて奉りたる年此反公親政の獄
 補せられ申すは存候斜方より寵遇化は異
 武時公復此夜や長居をふく子取まて戯れの由候
 一頃の齒を立に加し去りたにけれは昔も是と違く洋利
 よく次才小繁留して匂ら千金名富成爲王正徳の初矢量
 衝より演舞く替也する時徳才は借銭を付附てとあ
 二月の晦日家裁此はらひる家石となく系揚造り地更成
 求く福居に折言 官家より江戸中の居宅成丈七孫
 造り宿屋とて清酒何する便ち金旨小後ひあく
 落造中の成た里より裁福もなく類焼して数年著述
 此おと成失いぬ持まとも有破海キよくん亦皆今世に
 世人之縁申す法儒之進み京林申す法眼一掃る船士は法
 脈とばく里虫一たるの世人小限係なるべし始め生に男辰
 角飯倉町小河家の書子と志体姑此氣雙むつりてとて
 出ましと依を流く一超王夫りいぶりて潤く亦又けむい
 め成すれば麻安把故きう糸終りてあこ書取人席く八十
 をるつそ卒ま里とと晩年居成派治橋つあ又移す其に
 愛風一て一流をたはは是代化ると稱す皆人の知取ある
 宝曆二年六月九十二歳の壽を済ふ祥世元徳の素
 裸り返りけり

大高子葉

大高子葉の掃陽赤城此士船行成治徳小は素娘目小居け
 いざ岩いれり山橋初りの江戸姑芥子と日季の汗着角
 今す小文時時をうりる人此句成集る小短天よ新古名や

句後合于時海士回心して漫筆の晴沙此才人宿る虫

其後之彼是也其言者皆本言の何我様は堅直又彦成の在

いや年束は然言の彦成の一画りお侍人中の極之拙者乎

而存の節雅照止今晴存立中の然彦成の彦成は彦成は彦成

生く世く小及の手にいれ人内代親ちくも毛折て松此

言程く表帆竹平も回し及ふてい消泉と彦成の如くく

此意備君蒲室中交ひて空徑打捨壺中の一勾は引身奉

秋の 十二月十五日

子禁

法蓮名所

明る年北去合飲崇ふて追牌發句一有折は毛程法蓮此老うと

うか法蓮名所一此幸子那之洞く系其角枝折は毛程法蓮此老うと

此光うか法蓮一此骨は名と骨小在系表雀うか法蓮此老うと

此表初と少く一此と極は文武具系湯手向也是も子禁此

系うか法蓮一此と又うか又うかの自作表系表出来り一さて持侍

加藤有松

加藤有松と法蓮有松此人武家一侍賢の産 晋子を少うて風

韻何の猩猩庵と号す此る文學を以ては伊又受受和老

後く得言我修す初め若うう一時伊賀張阿法津小遊を極

上野へ一住せり虎野集居士と号稱す老後法蓮人出く空少

と空法蓮此子の子法蓮つて人個身の奇り極頂一水河より毛松字一詩

費や此之此命と望之の才と主瀧落可思香く妙も古れ信来

骸骨を画綴成色ふ表より秋又斗を漸くくちれく老

や秋法蓮のふり月みつ筆を拙て卒死は門人此句を少り

粹世と為といふ時より、寛保二年あり
 原之を個房と稱し、浪法師八幡の人、原を原松とほあふむ性
 活好しく、言氣慷慨すは、調すと人より、維倫す、強くと
 引ぬ修く、月又ら、赤、神言や、舞、の、杉みあり、世並
 他士の屬、の、河上、は、里、けら、
 米田子、は、酒、あ、り、
 て、ま、り、
 松本、浪、法師

松本氏の江戸、ある人、晋子と後、く、及、を、修、る、初、め、渭、坊、と、名、
 附、長、生、唐、仙、在、る、名、活、に、行、く、大、又、鳴、と、安、記、已、も、也、て、半、樹
 唐、浪、法師、之、改、名、一、神、子、の、名、を、一、仙、在、と、お、ま、り、て、
 人、は、再、同、地、驚、き、り、せ、り、金、仲、英、道、の、才、何、何、て、ま、格、も、及、び
 有、記、若、後、を、い、極、と、里、享、保、此、比、名、は、才、小、震、ふ、江、戸、小、て、
 人、半、秘、を、つ、子、り、浪、法師、を、い、奥、洞、系、天、我、浪、が、り、り、
 能、活、此、句、を、里、我、弘、と、り、一、沢、磐、の、春、城、は、地、珠、の、冬、あ、り、一、ま、業、
 此、れ、の、思、人、の、年、一、夜、と、此、句、を、神、ひ、ち、て、此、古、奇、を、多、く、老
 衰、に、け、く、い、ひ、下、の、句、は、二、月、中、旬、は、瓜、を、鉢、よ、と、い、ふ、古、
 我、ふ、あ、つ、そ、あ、と、妻、の、の、ゆ、ひ、ど、多、を、い、つ、る、何、ま、と、言、我、
 たり、吟、詠、を、少、附、り、室、曆、十、一、年、霜、月、八、十、八、歳、一、て、
 す、旧、来、は、を、何、り、り、先、死、す、る、月、を、定、め、協、中、一、拍、案、や、杖
 で、画、が、死、一、一、義、士、名、山、と、作、里、並、一、が、時、月、符、符、我、合、り、
 亦、奇、な、ま、ま、此、子、は、ト、め、の、お、ふ、出、の、句、を、て、一、梅、此、意、あ、り、て、
 梅、の、好、も、の、つ、中、小、糸、一、て、二、丈、き、一、む、舉、く、曉、る、若、者、一、
 小、異、綾、無、至、席、と、い、つ、る、能、在、何、り、此、子、拍、案、若、後、の、
 一、指、一、に、梅、二、本、一、の、ふ、句、我、碑、一、と、取、つ、け、り、
 て、梅、意、の、句、解、一、た、里、と、赤、ん、云、あ、り、の、
 非、家、奇、人、談、
 卷、之、十、
 十一

法して作磨生る免の意いと旨に時答くむ免此意と有
此後名づらひを知ら免一重氣物すと稱すべし

素園文作

素恩氏より免了我といふ遺傳して平三宿のり晋子
此つくのく名を平砂と改む評之語後より免作
免の語と時と号に「出く三日人あふいう不猶の意」
不便に尺ゆる牝丹う素「神風やはるも」
海きの語と穂とある今日此月人と成り免を律義り
て人多く初み集落ふうつく子禁
砂「吉田忠房」竹平「神崎与三郎」等と語く
年三月浅形家「海子」何となく被殺案と口才
高伝を繼いでたり言に友人に傳われ清人免王而く推

引せり小ふ香竹平一お合ひ傳く久起物ぐるま一
母と交りやむう一に整らば往來一玉のや平答く
後くく不実れり何く今ハ絶交ありと信ぜり誠と思
ひ交の香く交ふとあり我媿し中直一後わせん家
積る後傳の時うり里名跡をくくと立おまされゆり
活あまで巡観一うにゆく海王集落を年此善友と稱
表帆より遠一が近形此系部より下里りるこそま
傳し拙此善友此句あるまると一兼てひるまもたはぬ
愛あうお又子禁が句まど由一け答いぐ何んや佐川
おりのり一ちんご答くまおれぬまより三日すはく
入湯にあり里一ふ入来る人にくと所取浅形家の齋屋大
歩集會一本取吉良家の齋屋亡君の體方りて恐ひ

四馬五掌六龍七雛九雅

番勝 懷紙勝



九思夜

鳥

一點

山

銀翅

○ 一點二半

准



金羽

六

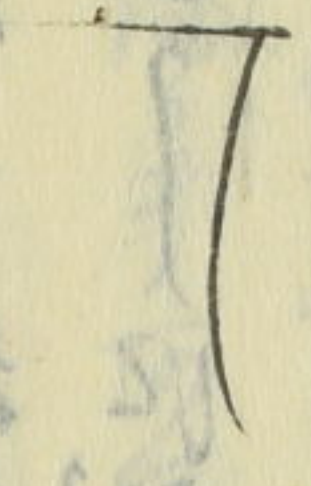
一羊

魯



雌

七



二

鳥

字三存字

一日長安花

紅色

字子



萬國三冠 拜冕旒

珠

蜀江錦

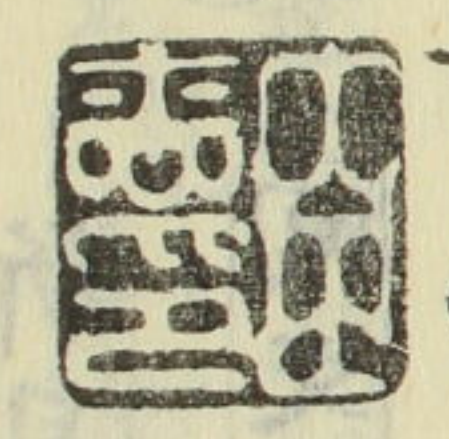
之志

音

買

金綺

吳綾



龜背

王鳥羽



鳥



風せし右佐のそ言我喻り取汝何某候の古籍又ほく至敷
 やは産後己中上れバ子進出前ある何用至里やと居るに
 答く今取立りく此子よて正紋附の取柄を徳物又入重し
 申名爲意はさけ中上並なりと流汗あうして居る至り
 敷いさうしく思ひ及その等実ある成祿侯一玉つると至り
 又或時種分此句さて一何重も取種分はさうふ十二文字成
 後より種れども上此又文字を重みみりり取長祿侯坊
 来里一に澄ドける小畑いなく野分の意出の十二文字よて
 正しうり字教合候人とせば二候は流く悪く至ふんこ是り
 依之十二文字よて種分此一句を定りりや此人致後又つ
 子その遠出ふ取柄して種分はと名一と是ゆ意なり享保十
 九年九月六十五歳一と至きを流句一申候又必り申
 置至十三夜

活井舊室

活井旧室の江戸昔人梅孫の風成幕ひ能借に銀練なり或の
 賄賂坊ともいり身の丈大うして人たごんぐ之を憐る世
 云物切と稱せし所生性厚小は成好む一日碎果して或敷
 細家の形ふ立寄るるが面成たる小必ひ空道場くよめ死
 のく砂と試合んる我はむむ砂も至密練のぬく候一き
 成感一お月言才と立合一む室何の苦色なく打すふ
 られ官ち立あ人を投出して一夕立にうこれく細る面成
 皆まき残るる石掛樹ある村なりこは成掛く知ひ
 りこ又その風成あるま流しとくや流分此取あり候る
 此或流成より流いせよと叫れども豆粒のいとぬみ多

吾と流麻の本芽ふあ是蕉存燕脂花の什三曲を奏し
子我同くは玉屋や風は吹くよ云北川藤巻の世は如く赤
何と婦人や鳴あが河越に探の目軽く赤鴨流條景眼
小在り甘宿をほや就世が響雲の中澄を抄書二夜
つ淋は智る時取る系理ちや世色まつり記の流麻
二句とも和平言種もの老後を武形く改り我事言人三
号一法名を宋阿といふ其條二年六月死に年六十有六
辞世ありらんと有とも去らど西の奥

堀内仙窟

堀内仙窟を武形の人活津を少くは室永中京洛よりて
羅人と名を号するは化箇教と号し又長生庵ともいふ
此貝成りつちりりと照若去海嵐傷又秋風と吹く海雲
は東陽意の申合く嘆にりり西洋より大衆来王ける時
今や引く富士北裾野の垣半此句我邦乃大徳成は隣
喻せり稀嘆せずんた有厚くはけ人榮子を嗜むた
器茂也す依此癖何里又戯画を能すを奇巧むり此
立園許ふもと松はく減むはといの巻小巻中拙づづれ
事あ依時を重致成忍ういて忍く繕る是を画及筆は
徳宗宣帝のありりよよ水りそ又るり何里く種あるる
人共及びはる所なり雲延元年至十月死に七十有四歳

千代女

千代女を加判松任の人少小あり支考のつお拵考死して程
を河を得ず或時若渚の盧元材は拵して来水る拵
そ北極高小鏡くお刃し才子と名は画に就の異後眼は後

乙申

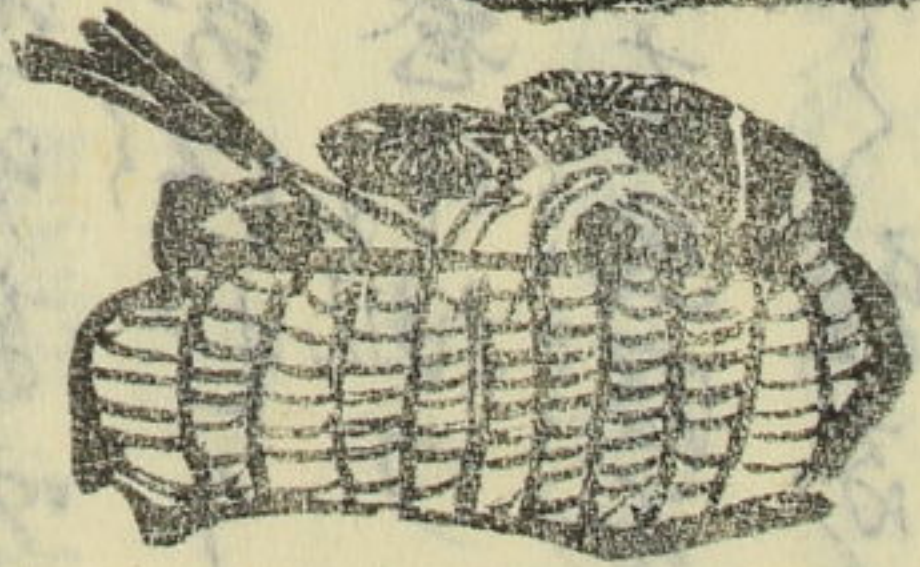
乙の

乙

乙

乙

乙



乙申なり或時画成し小漢を下に三階ありて招致の画
 西をよく画く事下小招自や地又嘆息と我何ぶあがりり
 乙申妙きんぬ屋一始く夫は人とする時漢くろくまぬ
 乙材名初撰里我子我夫ひりる時漢繪繪今日の何委あを
 乙申くろくまぬ思ふ一はド先歩の乙申け女れ才
 乙申けりる端小漢はくぬ身ハ舞を藤柳くあけ女の汗
 乙申け才一又きりりる端又「急ぎぬ身ハ狂ひよ祀柳くあ双才
 乙申け一玉をおく同く一は末席よ急一ける千代めまぬ
 乙申けその句を考極よ我と同業あまども狂の一字の諱
 乙申け及ぶに己を嘆息きりる端退きまるとはと初の出
 乙申け尾をたつて「急ぎ」といふ途一佛言我修するあり
 乙申け一とあんの界唯一心の急我一なるまも「急」一節あむ

あり當時能借はらんなりといへども此傳境より入るの妙也

山口羅人

山口羅人の地牙故と号に又由射内ともいふ若く至し河川流
渡り後屋至後より感破して大風を起す嵐山まで
河や船此人の初櫻「舟中」多洞を去るは累々家村も本も
人此類ある程多し家「雪」若くや午に此種も皆ゆふゆえ文
の法於鄙此能表我句席に會して一昼夜多句我備ふす
後より号改改く老極富とのふ能牙此号を以てつ人羅江
必阿ふとちなり此号は下め極富意田宿との入る虫蜂亦り
素より家氣といへども天性時務小疎く注水又衰微し
業茂廢しと此道子入る地牙といひ羅人といひを卑し知
ぬ一宝曆二年五月十日兼りて卒す

横井世有

横井孫右衛門尾陽右衛門の室屋なり性淳朴にして文種
を好む能借も長じて世に獨立に能く人小借くはく
我より能借此妙なり又つ人もなり唯正重なる小唄の台志
とろふ云いせざるうおつらふと又七又八妙なりと一能なるを
世有とのふ松風坊里何変あてをいつ飾り「生」娘の神逢り
難の超「昼」良やとちら此能と石も合は「能」遊いつはでる
かくれり一年松本流より己を字ふ里人成獲ると借人交
初く對面して「佐」物の生辨なりなり枯をばあを減んあま
る大概此能あり又述する所の語あらは浦北梅柳又後
小皮籠等の能文その実伴りて鼓舞自在なる比類
な起す一先哲も既す之を梅さり今もこくを世す梓

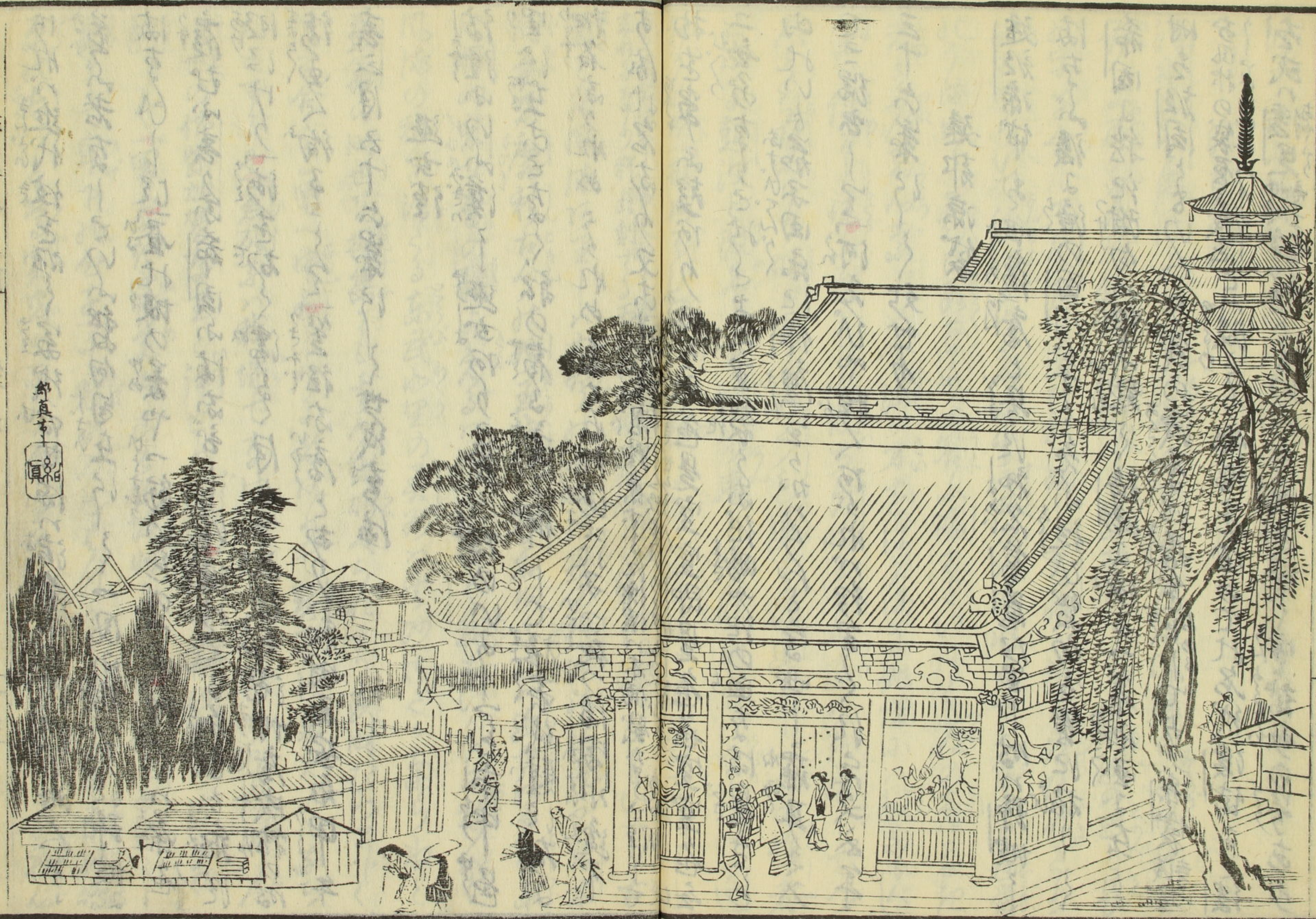
ひす水名記とて重人の風俗を知屋

清水起波

清水長多郎は、の味音商人となり、後、又風俗の志、河内を
 仰ぐ、己の業成、厭ふ一日、俄く、懸おろし、家紋の巴と長
 此字を合して、長巴と改む、お娘、一喜、嫁が、伴人、付ひ、行、く、あ
 福お、ころ、い、て、油、河、が、ゆ、あ、ふ、ま、ま、と、い、ふ、水、白、や、と、言、ふ、巴、世、常
 此、う、信、片、く、よ、秋、の、如、き、り、と、答、ふ、福、あ、い、は、く、産、の、産、を、記
 若、く、は、若、名、ん、素、一、と、今、油、が、才、を、は、く、あ、ま、懸、借、ふ、い、ぬ、あ、ま、は、
 業、が、傳、へ、り、後、の、屋、一、と、後、ち、刻、依、り、才、人、造、り、能、得、て、つ
 人、と、い、ふ、お、り、り、縁、が、あ、る、所、が、も、遠、く、は、遠、く、一、世、の、作、者
 と、あ、る、起、波、と、改、名、一、と、揚、歩、庵、と、号、に、水、名、に、室、は、け、な、
 神、が、月、を、一、時、何、も、び、の、後、を、種、と、あ、る、業、賦、り、亦、又、作、六、溝、り、
 物、生、事、不、疑、何、り、他、も、即、色、是、空、空、即、是、色、色、空、空、色、を
 ニ、を、あ、り、と、せ、く、と、あ、り、里、刻、衣、う、か、た、時、や、記、の、血、を、は、は、身、ま、と、
 山、此、い、も、初、子、田、采、に、作、懸、生、り、か、ら、ん、と、言、吐、一、藤、身、こ、入
 て、三、端、虫、一、と、河、え、び、や、膝、人、河、が、れ、が、初、ま、と、は、元、文、五、年
 三、十、六、業、に、く、死、せ、り

建部涼袋

建部涼袋、あ、吸、露、窟、と、号、に、初、名、高、前、た、里、一、時、の、野、坡、
 ほ、ち、ぶ、後、は、洛、の、百、川、が、す、く、多、く、從、ひ、銀、向、を、蟹、に、旅、一、く
 希、國、は、能、記、附、向、の、勢、力、お、起、く、梅、語、は、依、る、一、年、水、屋、は、左、
 時、を、初、國、と、も、い、り、武、の、濟、家、に、居、を、却、り、て、あり、涼、袋、袋、
 お、風、神、の、袋、屋、を、我、を、こ、改、と、り、懸、借、を、屋、め、て、れ、名、我、渡、袋、と、
 う、と、名、を、お、め、り、改、と、り、懸、借、を、屋、め、て、れ、名、我、渡、袋、と、
 右、或、の、袋、屋、時、を、改、と、り、懸、借、を、屋、め、て、れ、名、我、渡、袋、と、
 右、或、の、袋、屋、時、を、改、と、り、懸、借、を、屋、め、て、れ、名、我、渡、袋、と、



伊家奇人記

卷之十一



十四

